

後藤梨春『都老子』論：本草学と「老子」との連繋

吉田， 宰

<https://doi.org/10.15017/4742067>

出版情報：雅俗. 17, pp.17-26, 2018-07-17. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：

後藤梨春『都老子』論

—本草学と「老子」との連繫—

吉田 宰

はじめに

『都老子』（宝暦二年（一七五二）刊）は、本草学者・後藤梨春^①が著した戯作である。作者の梨春は元禄十五年（一七〇二）に生まれ、明和八年（一七七二）四月八日に没した江戸の人で、初め多田姓を名乗り、のち後藤と改めた。名は光生・光寧、字は梨春、号は梧陰庵・名張湖鏡・張朱鱗。田村藍水に本草学を学び、蘭学も修めた。また、躰^{せいしよ}壽館都講として本草学を講じた経歴も持つ。さらに、その著『随観写真』（宝暦七年（一七五七）自序、写^②）にみられるように、その学識は博物学的傾向も持つ。こうした学問的な活動以外では、『都老子』のほかに『竜宮船』（宝暦四年（一七五四）刊）という戯作も執筆しており、これらとともに漢字平仮名交り文の挿絵つきで書かれている。

本稿で論じる『都老子』については、つとに中野三敏が近世中期の老荘思想流行の中でこれを位置づけ、次のように述べている^③。

（上略）本書内容は「都鄙花見草」「菅神梅花之章」に始まって「酌酒対雪之章」に終わる四季の変転に応じた市井人間の行事生活に即して、無為自然の心法を説いたもので、何れも朱鱗の問いに梨春先生が答える形をとり、各巻六章ずつ、特に滑稽の表現に意を

用いるでもなく、庶民の分度遵守を強く訴えるでもなく、専ら老子の大道無為を最上の心法として説く辺り、従来の教訓読本とは聊か毛色の変わつた、知識人向けの内容が感じられ、杜鵑を論じて黄允交の「雑纂三統」を引き、杜若を述べて朱輔の「溪蛮叢笑」に言及する等、博物家としての梨春先生の面目を顕わしている。

中野が指摘するように、本書には老子の思想のうち、とくに「無為自然」「大道無為」を述べた章段が巻一を中心に多くみられる。また、本草学者としての側面も随所に現れている。しかし、全体を通してみた場合、老子の思想と直接関わりのない章段も数多くある^④。本稿で扱う巻一「因名惑実の章」および巻二「梅雨諸説の章」も一見その例に当てはまるものだが、これらの章段は、実は「無為自然」「大道無為」以外の老子の思想を踏まえていることを第三節で後述する^⑤。

さて、老子の思想およびそれ以外の雑多な内容を持つ『都老子』であるが、なぜ本草学者として活躍した梨春は老子の思想を受容したのか。第一には、中野が指摘したように、当時の老荘思想の流行が関わってこよう。だが、このほかにも、梨春が老子の思想を受容し得た要因はあったのではなからうか。すなわち、本草学と老子の思想とは思考態度における接点があったために、梨春にとって老子の思想は

受け入れやすく、その結果、老子の思想を織り交ぜた『都老子』という戯作は著されたと考えられるのである。

そこで、本稿では本草学と老子の思想との共通性について、『都老子』巻一「因名惑実の章」および巻二「梅雨諸説の章」を対象に考察し、梨春が「無為自然」「大道無為」以外の老子の思想を受容した要因を明らかにする⁽⁶⁾。また、巻一「因名惑実の章」では、梨春が本草学者にとつての常の戒めを説いており、その背景には梨春の属した本草学派の学風が影響していることも併せて指摘する。

一、「名」と「物」との対応関係

『都老子』巻一「因名惑実の章」の冒頭では、「かきつばた」という植物の名物（名称と実物）について、梨春は次のように考察している。

かきつばたといふ草、杜若（しじやく）といふ文字を古より書伝えけるに、近き比、文字さかんなるゆへにや、杜若は西土（せいど）の香草の名にて、かきつばたにはあらずとて、燕子花（えんしやくわ）こそ日本のかきつばた成とてもてはやす族多し。さりとはかたくななる了簡なり。もろこしにて

（一）物二名の誤りか

も日本にても、一名二物、二物一名なる物、あげてかぞへがたし。まず古の説では、日本の「かきつばた」という草は漢名では「杜若」であるとするが、近年の説によると、「かきつばた」と「杜若」は別物であつて、漢名でいう「燕子花」こそが日本の「かきつばた」であると説明される。しかし、梨春はこの近年の説を否定し、「もろこしにても日本にても、一名二物、二物一名なる物、あげてかぞへがたし」と主張する。

ここで、「一名二物、二物一名」という用語が出てくるが、後者の「二物一名」は、前者との意味上の重なりを避けるため、「一物二名」の誤りと考えて処理をする。これらの用語は、例えば梨春『本草綱目補物品目録』（享保十三年（一七二八）自序、宝暦二年（一七五二）刊）に、「山丹」を説明して、

山丹（さんたん） 出（ツ）三才図会（さんさいずゐ）。○玄達（げんたつ）曰今謂紅扁署（べんぺんしよ）。一種百合之類有（しん）三山丹（さんたん）。一名二物也。（卷上・木之属「山丹」）

とあり、また「伺潮鶏」を説明して、

伺潮鶏（きうしゆく） 光生（くわうせい）按（ルニ）載（スル）于臨海異物志（りんかいいぶつし）。石鷄（せきけ）一物乎。（卷下・羽之属「伺潮鶏」）

とあることから、⁽⁷⁾「一名二物」とは名称は同じだが実物は違うことを指し、逆に「一物二名」とは実物は同じだが名称は違うことを指すものであると分かる。なお、「一名二物」「一物二名」に類する表現として、「同名異物」「一物二種」「一類二種」といったものもあり⁽⁸⁾、こうした「名」と「物」との対応関係を考えることは、梨春のみならず本草学の分野では一般的であつたと考えられる⁽⁹⁾。

このことを押さえた上で、先の『都老子』の引用文はこう続く。

杜若は西土（せいど）にては香草、日本（やまと）にては紫に花咲く草と覚へすますべきを、色々弁をついやしぬる事、愚なるに似たり。然れども、其燕子花（えんしやくわ）こそ疑もなくかきつばたならば、詩文や西土へ渡すべき書籍などには用るも苦しがるまじきなれども、朱輔が溪蛮叢笑をみれば、花類（はなるい）燕子（えんし）に生（マ）於藤（ま）とあれば、かきつばたにてもあらず。

梨春は、「杜若」は中国では〈香草〉、日本では紫の花を咲かす〈花草〉であつて、「杜若」という名称が指し示す実物は、中国と日本とでは全

くの別物と理解すればよいものを、近年の説では色々と弁を費やしており、愚かであると斥け、そして朱輔の『溪蛮叢笑』を援用すること
で自説を裏付けようとしている。

ここで一旦、両説を整理しておく。まず近年の説では、一物二名の
考え方のみに基づいて、「燕子花」および「かきつばた」という二つの
名称は同一物を指すと主張する。一方梨春の説では、一名二物の考え
方に基づいて、「杜若」という一つの名称は異なる二つの物、すなわち
「西土にては香草」「日本にては紫に花咲く草」を指すと主張する。
と同時に、明言されてはいないが、「日本にては紫に花咲く草」とい
うのは、その実「かきつばた」のことを指すため、「杜若」および「か
きつばた」という二つの名称が同一物を指すという、一物二名の考え
方もここに反映されている。

このように、近年の説と梨春の説には相違点がみられるが、ここで
注目しておきたいことは、この二つの説が対立しているということでは
なく、むしろ「一名二物」や「一物二名」といった考え方に基づき
ながら両説の考察が進められているという、その思考態度である。言
い換えれば、本草学では「名」と「物」との結びつきは、必ずしも一
対一の固定的なものではなく、一つの「名」（もしくは「物」）に対し
て、複数の「物」（もしくは「名」）が対応することもあるという柔軟
な認識がみられる点、それこそが本草学者の思考態度を知る上で重要
なのである。

また、かきつばたに関する議論のあとには、「是にかぎらず、鯛・鯉
の類も、かく古より文字ありて、通用するに色々の文字に書かゆるた
ぐひ好ましからず。又遊女を傾城と言事もいかにぞや。（中略）いか程

の美麗なる遊女なりとて、人の城をかたむけ、人の身上をくつがへさ
んと思ふ心ざし、如何あるべきや」云々と、「名」にこだわるあまり、
それに対応する「物」の実体までも見誤つてしまふことを戒める内容
が章段の半ばまで続く。この章段の題名を「因名惑実の章」とする所
以である。総じて本章段には、「名」は「物」に対して本来第二義的な
ものであるという認識が存すると言えよう。なお、この認識と老子の
思想との関連については、第三節で後述する。

二、「名」と「物」との対応関係の是非

こうした、本草学における「名」と「物」との対応関係の認識を踏
まえた上で、続く巻二「梅雨諸説の章」では、次のように述べられる。

夏の頃、梅雨といふ事ありて、曆にも記しおきぬれども、其時候
日限さだかに知りがたし。もろこしの書を考るに、荆楚歳時記・
曆府通書・初学記・四時纂要・神枢・碎金録・三元帰正・埤雅・
五雜俎・本草綱目、等の説、少づ、の差ひありて、いづれを是と
せんや。（中略）先生のいわく、梅雨の説のみにかぎらず、万事の
上に如此諸説多き事有。考るに引用ひられたる十色の書物、何れ
も是成べし。いづれも非なるべし。

まず冒頭で、『荆楚歳時記』や『曆府通書』といった中国の書物を繙く
と、梅雨に関する説明にわずかな違いがみられる。これら諸説のうち、
一体どれが正しいのかという問いが提示される。これに対し、傍線部
のように、梨春はその是非が一樣には決まらないことを主張する。そ
の理由について、

いかんとなれば、梅雨と名付て、万物しめり、或は雨のみつゞきたる事、曆にしるせる日限とおくる、年あり、又はやき歳あり。其国々によりて少づ、の遅速有。

と述べ、「梅雨」という名称に対して、その実体には年毎の差や地域差があるからだと言明される。この説明における「梅雨」という名称とその実体との対応関係は、前節で確認した「一名二物」の考え方と同じ範疇で捉えられると言える。

また、梅雨の実体に地域差がある具体例として、中国の江南および徐州・淮州を引き合いに出す。

唐にも国によりてちがひあればにや。江南といふ所には三四月のころ露雨を梅雨と言、徐州・淮州にては六七月の雨を梅雨といふ。その所々、その年々にてきわまりたる事あらずとみへたり。惣じて曆は日月五星兩蝕などこそ算術にてたがわぬ事も有べし。風雨霜雪の類ひ、何んぞ一定ある事あらんや。

ここでの例を使って、先の傍線部のように梨春が答えた理由をより具体的に説明し直すと、例えばある書物に、「梅雨」(名)とは「三四月のころ」の「露雨」(物)である、と定義されてあった場合、江南においては正しいが、徐州・淮州では間違いとなってしまう。また、別の書物に、「梅雨」(名)とは「六七月の雨」(物)である、と定義されてあった場合、徐州・淮州においては正しいが、江南では間違いとなってしまう。

このように、ある名称(名)とその実体(物)との対応関係の是非は一定しないのである。したがって、「考るに引用ひられたる十色の書物、何れも是成べし。いづれも非なるべし」と梨春は主張したので

あった。

本章段において、梨春は「梅雨」という自然現象を例に、「名」と「物」との結びつきの是非が一定しないことを説き、その対応関係の是非が相対的なものであること、いわば是非の相対化を主張したのである。

三、老子の思想との関連

第一節において、『都老子』巻一「因名惑実の章」では、「名」は「物」に対して本来第二義的なものであるという認識がみられることを指摘した。これに関して、林希逸が著し、林羅山が校訂した『老子虞齋口義』(明暦三年(一六五七)刊)という『老子』の注釈書には、次のような文言がみられる⁽¹⁰⁾。

道可^ノ道非^{トス}常道^{トス}。名可^ノ名非^{トス}常名^{トス}。(卷上「道可道章第一」・本文)
此章居^ニ一書之首^ニ。一書之太旨^ニ、皆具^ニ於此^ニ。其意^ノ、蓋^{シテ}以為^ク、道本不^レ容^レ言^{トス}。纔^{カニ}涉^レ有^レ言^{トス}、皆是^ニ第二義^{トス}。常者不^レ変^レ不^レ易^{トス}之謂^也也。可^レ道^{トス}、可^レ名^{トス}、則^チ有^レ変^レ有^レ易^{トス}。不^レ可^レ道^{トス}、不^レ可^レ名^{トス}、則^チ無^レ変^レ無^レ易^{トス}。(同右・林希逸注釈部)

林希逸が述べるように、『老子』冒頭の章段は、老子の思想における中核であり、とくに重要なものと言える。そして、林希逸は「道」について、その不可言性に触れ、わずかにでも言葉で「道」を説明しようとすれば、それは第二義的なものとなってしまふと注釈をつける。また、「常道」と「常名」については、道はある断定的な道としないこ

と、名をある断定的な名としないことによつて、逆説的にそれが不変の道・不変の名を言い表すことになる」と説明する。つまり、『老子』では一定不変の真実の「道」や「名」というものは、言葉では名付けようのないものであると説かれているのである。

このように、老子の思想では言葉で説明された「道」や「名」は、「常道」「常名」たりえず、言い換えれば、言葉を用いての説明はその実体に対して第二義的なものとして認識されるのである。こうした老子の思想にみられる、言葉で説明されたものと実体そのものとの優位関係の認識は、第一節で述べた『都老子』巻一「因名惑実の章」での主旨・認識と一致するのである。

また、『老子虚齋口義』には、次のような『老子』本文もある。

天下皆知^レ美^ノ之^ヲ、為^レ美^ス惡^ニ。皆知^レ善^ノ之^ヲ、為^レ善^ス不^レ善^ニ。故有^レ無^レ相^シ生^リ、難^レ易^レ相^シ成^リ、長^シ短^シ相^シ形^シ、高^シ下^シ相^シ傾^キ、音^シ聲^シ相^シ和^シ、前^シ後^シ相^シ隨^フ。

(巻上「天下皆知」章第二・本文)

この章段についての林希逸による注釈は以下の通り。

此章即有^レ而不^レ居^シ之意^{ナリ}。有^レ美^レ則^チ有^レ惡^ニ。有^レ善^レ則^チ有^レ不^レ善^ニ。美^ニ而不^レ知^レ其^ノ美^ヲ、善^ニ而不^レ知^レ其^ノ善^ヲ、則^チ無^ク惡^ニ、無^ク不^レ善^ニ。(中略)相^シ生^リ相^シ成^リ、以下六句、皆喻^フ上面美^シ惡^シ・善^シ不^レ善^シ之意^{ナリ}。(同右・林希逸注釈部)

右の章段では、美醜、善不善、有無、難易、長短、高低、云々といった価値概念は、いずれも相対的なものであり、絶対的なものではないことを説いている。林希逸が「皆喻^フ上面美^シ惡^シ・善^シ不^レ善^シ之意^{ナリ}」(傍点筆者)というように、一見どれほど美しいものであると、それは表面的な認識でしかなく、場合によっては醜いとさえ捉えられること

や、その逆の場合もありうるように、美醜などの価値概念は見かけ上のものであって、その実、相対的なものである。

このように、老子の思想では物事の価値を相対的視点から捉える点にも特色があるのだが、これは前節で述べた『都老子』巻二「梅雨諸説の章」では是非の相対化と通じる。すなわち、表面上の認識に固執することなく、相対的観点から物事を把握するという思考態度において、梨春と老子の思想には共通性がみられるのである。

以上、『都老子』における梨春と老子の思想との関連を指摘したが、ここで改めて押さえておきたいことは、梨春の本草学的認識と老子の思想との思考態度が重なり合つて、「名」の第二義性や是非の相対化は主張されたということである。すなわち、本草学では「名」と「物」との対応関係を一对一の絶対的なものとみなすことなく、柔軟に捉えるという基本的な姿勢があり、これを踏まえた上で、梨春の場合は「名」よりも「物」の重視へと傾いた。そして、こうした梨春の本草学的認識と老子の思想における「名可^レ名^{トス}非^ニ常^ノ名^{トス}」という考えとが互いに響き合い、「名」を第二義的に捉える主張へとつながったのである。また、右に述べた梨春の本草学的認識に基づきながら「梅雨」という自然現象を考察した結果、老子の思想における相対的視点とも通じ合い、是非の相対化は主張されたのである。

このように、現実世界の「物」に根差した梨春の実証的な本草学的認識と思弁的な老子の思想とが、その思考態度において共鳴する要素を持つていたため、梨春にとつて老子の思想は受容しやすく、その帰結として『都老子』巻一「因名惑実の章」および巻二「梅雨諸説の章」は執筆されたのであった。

四、本草学者の常の戒め

『都老子』巻一「因名惑実の章」では、梨春が「名」を第二義的に捉えていることを第一節において確認し、またこうした「名」に対する認識と老子の思想との関連も前節で述べたが、実はこの「因名惑実の章」という章題そのものが本草学者にとっては馴染みのあるものであった。

例えば、本草学者の松岡恕庵が訓点を施し、校訂を加えた和刻本『周憲王救荒本草』（享保元年（一七一六）刊）には、恕庵による頭注に、「按是物有二種。（中略）不可依名迷実」（巻六・草部「雞腿兒」という文言がみられる。また、本草学のみならず博物学的傾向も持つ平賀源内の『物類品隲』⁽¹¹⁾（宝暦十三年（一七六三）刊）にも、「京師及東都ノ医人名同ヲ以テ依レ名迷レ実」（巻三・草部「天芥菜」という言葉が確認できる⁽¹²⁾。さらに、「因名惑実」という言葉そのものではないが、貝原益軒の『大和本草』（宝永六年（一七〇九）刊）凡例には、次のようにある。

一、本邦諸州所^{スル}産^{スル}之品物、各有^ニ其郷土之方言。而其名称不^レ同。（中略）観^ル者勿^レ訝^ニ名称之異。唯^ニ察^シ其形状之真^ヲ、則可也。これもまた、「名」よりも「物」を重視した姿勢の表れであり、「因名惑実」べからずという戒めに通じるものであろう⁽¹³⁾。

このことから、本草学に携わった者であれば、「因名惑実の章」という章題から、これを本草学における常の戒めとして読み取り、敏感に反応したはずである。

ここで、日本の近世中期頃における本草学派の主な系統をみてみた

い。注1所掲の『明治前日本生物学史』では、次のように説明されている⁽¹⁴⁾。

江戸時代の博物学の主な流れは、別に勃興した蘭学派は別として、稲若水の学統を継ぐものと、阿部将翁のものに分けられる。この両派は一長一短のあることを否み難いが、いずれも永くその伝統を生かして、生物学の発達に寄与している。文献の博渉と实地の研究とを併用した学風は若水学派に著しく、实地を先にし、これを証するに文献の援用を以てしたのは、将翁につづく人達によつて実行せられた。

稲若水とは稲生若水のこと、彼は明暦元年（一六五五）に江戸で生まれ、のち京都に移り、正徳五年（一七一五）に同地で亡くなった。若水は福山徳潤に本草学を学び、また元禄六年（一六九三）には加賀侯前田綱紀に儒者役として仕え、綱紀の命により『庶物類纂』の編纂にあたった人物でもある⁽¹⁵⁾。若水門の代表的な人物としては、先にも触れた京都の松岡恕庵（寛文八年（一六六八）生、延享三年（一七四六）没）がいる⁽¹⁶⁾。

また、阿部将翁は陸奥盛岡の人で、寛文七年（一六六七）頃に生まれ、宝暦三年（一七五三）に江戸で亡くなった。徳川吉宗の命により、採集使として全国各地を踏査したことで知られる⁽¹⁷⁾。将翁の代表的な門下生には、江戸の田村藍水（享保三年（一七一八）生、安永五年（一七七六）没）がいる⁽¹⁸⁾。

この両学派の違いをより明確にして、上野益三はこう述べている⁽¹⁹⁾。（上略）しかし、实地踏査という方法を重視した将翁の学問的態度は、若水恕庵一派とはちがったものである。若水、恕庵らは読書

で得た知識の集積が主で、实地観察はむしろ従であった。右に述べた将翁の学問的態度は、田村藍水、平賀源内らに承け継がれ、近代科学的な博物学の芽が育てられた。

右の言を両門派の各人にそのまま当てはめるには、なお慎重でなければならぬ⁽²⁰⁾が、若水門ならびに将翁門の大まかな学問の傾向を知る上では重要な指摘である。そして、本稿のはじめにでも述べたように、梨春は将翁門の藍水から本草学を学んでいる。また、阿部将翁と松井重康が自らの採葉について口述したものを高大醇という人物が筆録し、これに梨春が序文と注釈を施した『採葉使記』（宝暦八年（一七五八）序、写）という著作があることから、梨春と将翁との関係も少なからず見出される。

梨春が文献上の知識のみに終始せず、実際に採葉にまで赴いていたか、筆者の調査は及びきれていない。しかし、採葉という行為に限定しない場合、彼が実際の「物」の入手・観察にまで目を向けていたことは、薬品会⁽²¹⁾への出品から窺い知ることができる。

例えば、宝暦七年（一七五七）七月に藍水が江戸の湯島で開いた薬品会は、前年に藍水へ入門した平賀源内の提案によって企画されたもので、薬品会の嚆矢とされている⁽²²⁾が、これには約一八〇種⁽²³⁾が出品されており、梨春は竹葉柴胡・馬蘭・琉球産の水斗⁽²⁴⁾・欸冬・瞿麦・曼陀羅花の五種を出品している。また、その後の同薬品会のうち、翌年四月には落新婦・白花竜胆・蘭子の三種を、翌々年八月には色鮫鱈（色アンカウ）の一種を梨春が出品した記録も残っている（以上、平賀源内『会薬譜』（成立年未詳、写）による）。

さらに、同十年（一七六〇）四月十五日に大坂の戸田旭山によって

開かれた薬品会は、関西初の薬品会とされ⁽²⁵⁾、全国各地から出品されたが、梨春は日光産の長石を出品している（戸田旭山『文会録』（宝暦十年（一七六〇）刊）による）。

このように、梨春は書物の上での研鑽以外にも、実物を入手し、それを薬品会に出品していることから、「物」そのものを重視する学風にも親しんでいたことが分かるのである。

「因名惑実」べからずという戒めは、知庵がそうであったように、必ずしも将翁門ばかりに意識されたものではなく、広く本草学者全体にわたってのことであつたらう。しかし、梨春の属した門派が若水門に比べ实地踏査をより重要視し、自らの眼で実物を採集・観察していたということが、梨春の学的立場の形成に与えた影響は少なくないはずである。

以上のことを踏まえると、梨春が『都老子』において「因名惑実の章」を設け、「名」を第二義的なものとしたその背景には、彼の属した本草学派の学風の影響が考えられ、また前節で述べたように老子の思想とも通じるものがあり、如上の章段は執筆されたのである。

おわりに

本稿では、なぜ本草学者である梨春が老子の思想を受容したのかという疑問のもと、『都老子』巻一「因名惑実の章」および巻二「梅雨諸説の章」を対象に、本草学と老子の思想との思考態度における接点を考察することで、その問題解決を図った。

そこで明らかとなったことは、第一に、本草学では「名」と「物」

との結びつきを柔軟に捉えるという認識方法が、梨春の場合は「名」よりも「物」の重視へと傾き、これと老子の思想における「名可^キノ^ハト^ス非^ズ常^ノ名^ニ」という認識とが重なったこと。第二に、右に述べた梨春の本草学的認識から派生した、「名」と「物」との対応関係における是非の相対化が、老子の思想における相対的認識方法と似通っていたこと。以上の共通性が、本草学者・梨春に老子の思想の受容をより容易にさせたのである。

また、『都老子』巻二「因名惑実の章」は、その章題そのものが本草学者の常の戒めを説いており、その背景には梨春の属した本草学派の学風が影響していることも併せて指摘した。

梨春は本草学者でありながら、『都老子』のほかにも『竜宮船』という戯作を著しており、彼の思想を考察する上ではこの著作も見逃せない。『竜宮船』を執筆するにあたっての知識の源泉や版權上の問題などについては、稿を改めて述べたい。

注

- (1) 以下、梨春に関する伝記は、日本学士院日本科学史刊行会編『明治前日
本生物学史』第一巻（新訂版、臨川書店、一九八〇年、二八二―二八五頁、
中野三敏「静観坊まで―談義本研究（五）―」（『戯作研究』、中央公論社、
一九八一年。初出一九七三年）、二一八―二三三頁、『国書人名辞典』第二
巻（岩波書店、一九九五年）「後藤梨春」項、磯野直秀『日本博物誌総合年
表』（『総合年表編』（平凡社、二〇一二年）明和八年四月八日条、ほか参照。
とくに梨春の生年については、元禄九年説（『明治前日本生物学史』）、同十
年説（『国書人名辞典』）、同十五年説（中野、磯野）といくつかあるが、本
稿では原念斎の「史氏備考」巻二十六に載るといふ「後藤梨春墓記」に基

づく元禄十五年説を採る。なお、ほか二説の根拠は示されていない。梨春
の墓は江戸芝愛宕下青松寺にあるというが、現存不明。

- (2) 注(1) 磯野・宝暦七年二月条に「二月、後藤梨春、『随観写真』二〇巻の
自序を記す。ただし、宝暦末年までの記事がある」とある。筆者原本未見。

- (3) 注(1) 中野、二一九頁。

- (4) 例えば、巻二「雷火雷光の章」「富士塩尻の章」、巻三「上古衣裳の章」
「秋山成錦の章」、巻四「官家玄猪の章」「稻荷神徳の章」など。

- (5) ただし、巻一「因名惑実の章」については、章段の終盤に「自然大道」と
いう語が用いられることから、ここに老子の思想の反映を読み取ることは
可能である。しかし、第一節で詳しく述べるように、章段の前半部は老子
の思想とは一見関わりのない内容が展開されている。

- (6) 本草学と老子の思想の「無為自然」「大道無為」との関連については、そ
の有無を明らかにすることができなかった。今後の課題としたい。

- (7) 梨春の著作中で「一物二名」という用例は確認できなかったが、例えば
貝原益軒『大和本草』（宝永六年（一七〇九）刊）には、「又ソバノ木アリ。
（鳥の足は）是ト一物二名乎」（巻十二・木之下・花木「鳥ノ足」とあり、
その用例が確認できる。

- (8) 例えば、稲生若水が校訂した和刻本『本草綱目』（正徳四年（一七一四）
刊）には、「釈名」における李時珍の割注で、以下のようにある。「王孫与
牡蒙一名異物」（草部第十二卷・草之一「黄耆」）、「独活以羌中来者、為
良。故有羌活、胡王使者諸名。乃一物二種也」（草部第十三卷・草之二「独
活」）、「但蘭草・蕙草乃一類二種耳」（草部第十四卷・草之三「薰草」）。

- (9) 杉本つとむは、「名とモノとの厳密な対応を考えることが、本草学の重要
な研究分野であるわけで、これを（名物学・名物ノ学）とよんだ。中国で
はじまった学問である」（『江戸の博物学者たち』、講談社学術文庫、二〇〇
六年、二四頁）と述べている。また、名物学については、青木正児『中華
名物考』（春秋社、一九五九年）が詳しく、「本草学は薬性を研究する前提
として其の名物学的研究を必須としてゐる」（『名物学序説』、二二頁）と、
本草学と名物学との関係を指摘する。そのほか、注(1)『明治前日本生物

学史』第一巻においても、「本草書あるいはそれ以外の文学書史書等の群籍に現れた動植物などの名称が、何物を指すかを考証しようとするのが名物学である」(三二一頁)と説明される。

(10) 『老子』の注釈書に関して、日本近世中期の中頃には徂徠学派を中心に王弼注が重んじられ、近世初期より用いられてきた林希逸注はその独占的地位を失っていく。しかし、その後も既成の老子注釈書としての林注の存在意義は失われることなく、王注と並び、老子注釈の「諸家」の代表格として扱われている事例も存する(大野出『日本の近世と老荘思想』(ペリカン社、一九九七年)序章参照)。梨春と徂徠学派との関係は今のところ見出せず、本稿において王注を引用する積極的な理由はない。また、林注の引用についても同様ではあるが、本稿では論旨の理解をより円滑にするに相応しいと判断される林注を用いることとする。

(11) 本書には、宝暦十三年の梨春および同年の藍水による序文が備わる。

(12) 杉本つとむは、この源内の言葉に触れて、「源内が名二依リテ実二迷ウと忠告している点は、これまた本草学の根本問題であるが」(『江戸の博物学者たち』、八六頁)と述べている。

(13) 杉本つとむは、この益軒の凡例に触れて、「つまるところは名にまどわされることなく、ものの真を考察認識すべしということである」(傍点ママ。同右、六五頁)と述べている。

(14) 注(1)『明治前日本生物学史』第一巻、一七四頁。

(15) 若水については、注(1)『明治前日本生物学史』第一巻、一六一〜一七〇頁、ほか参照。

(16) 恕庵については、太田由佳『松岡恕庵本草学の研究』(思文閣出版、二〇一二年)に詳しい。

(17) 将翁については、注(1)『明治前日本生物学史』第一巻、一七一〜一七三頁、注(1)磯野・享保六年七月十三日条、ほか参照。とくに生年については磯野に拠った。

(18) 藍水については、注(1)『明治前日本生物学史』第一巻、二二二〜二二三頁、ほか参照。

(19) 上野益三『日本博物学史』(普及版、講談社学術文庫、一九八九年)、八一〜八二頁。

(20) 例えば、注(16)太田は、享保中頃を境にして、「恕庵は野外調査へほとんど出かけなくなり、その代わり、各国から自分の教えを請うて集まる門人たちを通じて積極的に情報を集めるようになった」(二九頁)と、恕庵の研究スタイルに変化があったことを指摘している。

(21) 注(1)磯野『索引・資料編』に収まる用語集のうち「薬品会」の項で、「薬品・動植物・関連書籍などの展示会、物産会・産物会・薬草会・博物会とも称した。さまざまな製品や、古器物(石鏃・古瓦の類)、書画、洋品などを含める展示会もあった」と説明される。

(22) 注(1)磯野・宝暦七年七月条参照。

(23) 注(1)磯野・宝暦十年四月十五日条参照。

使用テキスト

本稿での引用は読解の便を考慮して、私に句読点や濁点を補い、ルビを省略した箇所がある。またとくに断りのない限り、引用における括弧内の記述および傍線は筆者によるものである。

● 『都老子』九州大学附属図書館読本コレクション蔵本(読本Ⅲ/宝暦2/ナ1)。
<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/recordID/411573?hit=1&caller=xc-search>

● 『本草綱目補物品目録』早稲田大学古典籍総合データベース(二〇一〇-02895)。
http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/n01/n101_02895/index.html

● 『大和本草』架蔵本。

● 『本草綱目』(和刻本、稲生若水校訂) 国立国会図書館デジタルコレクション(特1-970)。
<https://ndionline.ndl.go.jp/#/detail/R300000001-1000007558176-00>

● 『老子虞齋口義』国文学研究資料館鶴飼文庫蔵本(96-1268-1~2)。

- 『周憲王救荒本草』（和刻本、松岡恕庵校訂） 近世歴史資料集成第四期第十卷『救荒1』（科学書院、二〇〇六年）。
- 『物類品隲』 『平賀源内全集』上（中文館書店、一九三五年）。
- 『会業譜』 『平賀源内全集』上（中文館書店、一九三五年）。
- 『文会録』 国立国会図書館デジタルコレクション（特16409）。
<https://ndlonline.dl.go.jp/#/detail/R300000001-1000007315488-00>

付記

本稿は、平成二十八年年度西日本国語国文学会（於鹿児島大学）における口頭発表の一部に基づき、大幅に加筆修正を施したものである。席上および発表後にご教示を賜った諸氏に厚く御礼申し上げる。

本稿は、平成二十九年年度JSPS科研費・特別研究員奨励費「18世紀を中心とした近世文学史の再構築―文理横断的視点から―」（課題番号：17J07008）による成果の一部である。